

観成園だより

発行：特別養護老人ホーム 観成園
長野県駒ヶ根市赤穂 3214-1
tel(0265)83-1611 fax(0265)83-1616
ホームページ：http://inanfukushi.or.jp



コンバインで稲刈りのしている様子を【うちょうらんユニット】から撮影しました。



【B棟1階】廊下の突き当りの花壇で秋（彼岸花）を見つけました。

文化琴（8月18日）



皆さん昔歌った懐かしい音楽の琴の音色に聴きいていました。

ふれあい広場（9月1日）



暑い中お疲れさまでした。

天気にも恵まれたたくさんの人達が集まり、楽しいひと時を過ごしました。

観成園敬老会(9月16日)



年間行事の重要なイベントとして、敬老会が盛大に開催されました。駒ヶ根市長はじめ高坂理事長、有賀正明家族会代表や歴代園長などが、お祝いにご出席してくださいました。



100歳(百寿) 宮下久子様



99歳(白寿)羽生ツギ様



(白寿)大川光子様



(白寿)小林たかゑ様



(白寿)原 うめ様



(白寿)澤田千江様



(白寿)橋場うめよ様



88歳(米寿) 向山ケサエ様



(米寿)中山 實様



(米寿)清水かずゑ様 ♡ 清水武夫様(ショート)



(米寿)伊藤けみ子様



(米寿)北澤喜久子様(ショート)



(米寿)小野昌子様



77歳(喜寿) 春日すみ子様



皆様の今後のご健康と長寿を心よりお祝い申し上げます。

宿直業務の皆さん



鬼頭 隆雄様 昭和 19 年生

65 歳までサラリーマン生活を過ごし定年後は民生委員 6 年、生活支援コーディネーターを 2 年させて頂きました。

現在は、NPO 法人の関係で利用者の送迎等も行っております。今年の 7 月から観成園にお世話になっております。

趣味は、囲碁、そば打ち、写真クラブなど楽しみながら忙しい日々を送っております。



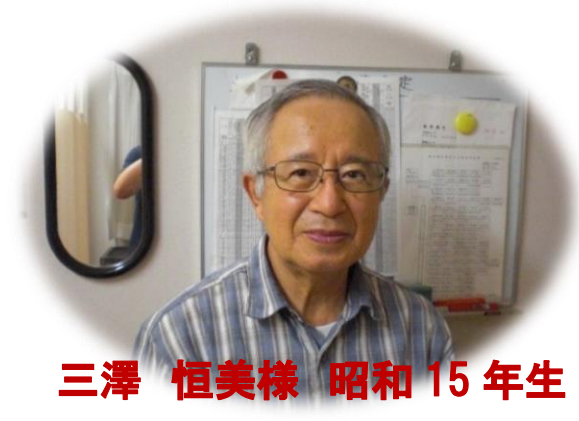
山岸 正雄様 昭和 17 年生

昭和 33 年に上京し、55 年間東京で暮らしてきました。

平成 23 年に定年になり、家内と一緒に田舎(駒ヶ根市)に戻ってきました。

観成園にお世話になって約 8 年になります。

趣味は、スポーツ(野球、ゴルフ) マージャンなどやります。



三澤 恒美様 昭和 15 年生

定年後は、丸亀市⇒駒ヶ根市へUターンしました。すぐにシルバーセンターの会員になり、保育園、赤穂中学校の用務員を 8 年間させて頂きました。その後、観成園にお世話になり現在に至っております。

社会奉仕として五十鈴神社や北割保育園の清掃作業、交通安全「人波作戦」を行っております。

趣味は、囲碁、将棋、折り紙などしております。

宿直業務の皆さん施設内の巡視や電話の対応、又は非常事態に備えていつも待機してくださり誠に有難うございます。 これからも、お身体を大切にして、宿直業務をよろしくお願いいたします。

まだまだ暑さの残るある日のこと。私は不思議な人に会いました。

近所のガキ大将に馬鹿にされる。人には見えないそれが見えていた私は話題の元だった・・・悪い方の。

「やーい。うそつき花絵(はなえ)」

今日も今日とてあいつらに馬鹿にされる。悔しい思いをしながら祭りが行われる神社へと逃げ込んだ。

《面白そうな遊びをしているね》

頭に響く声。振り返ると狐の面をつけた人がいた。

「・・・だれ？」

私が聞くとその人は笑う。

《それを聞いてどうするの？》

「別に・・・知らない人に話しかけられたら返事をしてはいけないとかあさまに言われているのよ」

《それは困ったなあ》

狐の面は笑う。けらけらと楽しそうだ。

「あんた一人なの？」

《君も一人みたいだけど》

「私はいいの。人とは違うから」

《人と違うと一人になるの？人間なんて皆同じなのに変なの》

「同じじゃないわ。私にはね、お化けの声も聞こえるのよ」

驚かせるつもりで言う。すると狐は笑った。

《そのどこがすごいの？》

「え？」

《ああ、そういえばこの時代の人はどうほとんどが見えないのか》

狐面は残念そうにいう。それからスーッと私に近づいてきた。

《君はとても魅力的な子なのに、ね》

狐面は笑うと私の頬に手を添えた。

不思議なことにその面から見える瞳はまがい物のようで・・・私は思わず見つめてしまった。

《きっとすぐに君も皆と同じになよ》

その人は少し寂しげに笑うとその場から消えてしまった。

それが二十年前の話。

「花ちゃん、これ持って行って」

「了解！」

今日は年に一度の祭りの日である。昔より活気づき、屋台もたくさん並ぶようになった。

あの人とはあれ以来一度も会うことはなかった。母にも父にもその人について聞いたけど知らないようだ。

「花ちゃん」

「え？なかに、千代(ちよ)ちゃん」

あれから数年後狐面の言う通り人ならざるものが見えなくなった。私も皆と同じになったのだ。

ふと何気なくあの人と会った場所を見る。その場所には薄い影みたいものが見えた。

「あ、」

思わず声が漏れた。するといつぞやの懐かしい声がした。

《今年も賑わいそうだなあ。まあ、誰も僕は見えないけど、ね》

嬉しそうだけど寂しそうな声が空へと消えていった。

誰も知らない 祭り人